

ローマの信徒への手紙 3:9~6:23 ～堀川寛による広島弁訳～

(広島弁訳の意味) (訳者の解説・蛇足)

ほいじゃどうなるんな(それではどうなるのか)。わしらユダヤ人は異邦人にまさったところがあるんか? なんもありゃあせん(何もない)。これまで言うてきたように、ユダヤ人もギリシア人も皆、罪に支配されとるんじゃ。旧約聖書にこがいに(このように)書いてあるじゃろう。

「正しい者はいない。一人もいない。
悟る者もなく、神を探し求める者もない。
皆迷い、だれもかれも役に立たない者となった。
善を行う者はいない。ただの一人もいない。
彼らののは開いた墓のようであり、
彼らは舌で人を欺き、その唇には蝮の毒がある。
口は、呪いと苦味で満ち、
足は血を流すのに速く、
その道には破壊と悲惨がある。
彼らは平和の道を知らない。
彼らの目には神への畏れがない。」

わしらがよう知つとるように、律法の言うこたあ律法のもとにおるもん(者)に向けられとる。神様の裁きの席で口答えできるもんは誰もおらん。なんでか言うと、どんだけ頑張って律法を守ったって神様に義しいとされるもんはおらん。律法は人間が罪深いことを知らせるだけじゃ。

ほいじゃがのう(しかしながら)、今は違うんじゃ! 律法を守るんと違うやり方で、しかも律法と預言者(旧約聖書)の保証付きで、神様が義しいとして下さるんじゃ。そりゃあ、イエス・キリスト様の忠誠による神様の義しさで、信じるすべてのもんにおんなじ(同じ)ように与えられるんよ。わしら人間は皆、罪を犯したけえ、神様の栄光に近づくことすらできん。キリスト・イエス様の贖罪のおかげで、気前のエエ神様がただで義しいとして下さるんじゃ。神様は忍耐を持って人間の罪を見過ごしてこられたんじゃが、キリスト様の血による忠誠をなだめの供え物とすることで神様の正義を示しちゃった。

ここにきてそうしちやったんは、神様御自身が義しい方じゃと証明すると同時に、イエス様を信じる者を義しいとするためじゃ。何を偉そうな顔しとんじや! 行いについちゃあ何も誇れることはない。ほいじゃが信仰は別じゃ。わしらが義しいとしてもらえるんは、律法を守るけえじゃのうて、(イエス様を)信じるけえじゃ。神様はユダヤ人だけの神なんか。異邦人の神でもあるんじゃないんか。そりゃそうよ。この神様は異邦人にとっても神よ。神様は一人しかおらりゃせん(おられない)。この神様は、割礼のあるもん(ユダヤ人)を信仰によって義しいとし、割礼のないもん(異邦人)にも信仰によって義しいとしてくださるんよ。ほいじゃあ信仰によって律法はあ(もう)いらんよう(要らなくな)ったということか。そがなことはない。わしらはこれからも律法を大切にせん(や)あいけん。

第4章

わしらの先祖のアブラハムについてはどがあに(どのように)説明すりゃええかのう。もしあん(彼)が(彼)が行いによって義しいとされたんなら威張ってもええが、神様の前じゃそりゃあできん。聖書に何と書いてあるか。「アブラハムは神を信じた。それが、彼の義と認められた」とある。働くもんが報酬をもらうんは当然のことじゃ。ほいじゃが不敬虔なもんでも同じように扱われる神様は、働かんもんでも、信仰によって義しいとして下さるんじゃ。ダビデもおんなじように、行いがのうて(なくて)義しいとされた人の幸いをうとうとる。「不法が赦され、罪を覆い隠された人々は、幸いである。主から罪があると見なされない人は、幸いである。」この幸いな人とは、割礼を受けたもん(ユダヤ人)だけなんか、それとも割礼を受けとらんもん(異邦人)も含まれるんか。わしらは声を大にしていうで、「アブラハムの信仰が義と認められた」んじゃ! どがいにして(どのようにして)認められたんか。割礼を受けた後か、それとも前か。もちろん割礼を受ける前じゃ。アブラハムは、割礼を受ける前に、信仰によって義しいとされた印として割礼を受けたんじゃ。ほいでアブラハムは、割礼なく信じ義しいとされるもんの父となったんよ。もちろ

ん割礼を受けたもんの父ともなったが、あくまでもその信仰の足跡に従うもんの父になったんじゃ。

神様はアブラハムと子孫に世界の相続人になるいうて約束しちゃったが、そりゃあ律法によってじゃのうて、信仰によって義しいとされたけえじゃ。律法を守るもんが世界の相続人になるんなら、信仰は無意味じゃし、約束は反故になったも同然じゃ。律法は(神様の)怒りを招く。違反のない律法はないけえじゃ。信仰こそが鍵じゃ。わしらは信仰によって世界の相続人になるんじゃ。神様の一方的な恩恵によって、アブラハムの肉の子孫だけじゃのうて、信仰の子孫もその約束にあずかれるんじゃ。アブラハムはわしらのみんなの父なんじゃ。「わたしはあなたを多くの民の父と定めた」と書いてあるとおりじゃ。アブラハムは死者に命を与え、ないもんをあらせる神様を信じた。あんに(彼)は絶望のまっただ中でも希望を捨てず、「あなたの子孫はこのようになる」と言われた神様を信じ、多くの国民の父となった。そのころあんに百歳になりかけとって、はあ(既に)自分は衰えとるし、妻サラも子どもが産めんと分かっとったのに、信仰は弱りやせんかった。あんに不信仰によって神様を疑うどころか、信仰によって強められて、むしろ神様の栄光をたたえよった。神様は、約束したことを守り実行されるお方じゃと信じ切っとったんじゃ。じゃけえ、神様はあんにを義しいとされたんじゃ。ほいじゃが、「それが彼の義と認められた」という言葉は、アブラハムのためだけにあるんじゃないでえ。わしらのためにもあるんじゃ。主イエス様を死者の中からよみがえらせたお方を信じるなら、わしらも義しいとされるんじゃ。イエス様は、わしらの罪の身代わりとなるために死に渡され、わしらが義しいとされるために復活させられたんじゃ。

第5章

こがいな(このような)わけで、わしらは信仰によって義しいとされたんじゃけえ、わしらの主イエス・キリスト様のお陰で神様との間に平和な関係をいただいとる。ほいで、信仰のゆえに、めぐみの場に招待され、神様の栄光の希望を誇りにしとる。それだけじゃのうて、苦しみも誇りにしとるでえ。苦しみは忍

耐力を、忍耐力は品性を、品性は希望を生み出すと知っとるけえじゃ。(こうして手に入れた)希望は失望に終わりやあせん。わしらに与えられた聖霊によって、神様の絶対愛がわしらの心に注ぎ続けられとるけえじゃ。キリスト様はのう、わしらがまだなんもできなかったのに、お定めになった時に、神を恐れんもんのために死んで下さった。正しい人のために死ぬもんはほとんどおらん。ええ(善い)人のためなら命を惜しまんもんもおるかもしれん。ほいじゃが、わしらがまだどうしようもない悪人じゃったときに、キリスト様がわしらの代わりに死んでくれんさったことで、神様はわしらに対する絶対愛を明らかにされたんじゃ。わしらはキリスト様の血によって義しいとされたんじゃけえ、キリスト様のお陰で(やがて来る)神様の怒りからも救われるんはなおさらのことじゃ。敵対しとったのに、御子の死によって神と和解させてもうたんじゃけえ、和解させてもらうた今は、御子の命によって救われるんは当然じゃ。それだけじゃないでえ。わしらの主イエス・キリスト様のお陰で、わしらは神様を誇ることができる。神様と和解させてもうたんじゃけえ。

一人の人が罪を世にもたらし、罪によって死が入り込み、死はすべての人に及んでしもうた。みなが罪を犯してしもうたけえじゃ。律法が与えられる前から罪は世にあったが、律法がなければ、罪が罪として定められることはなかった。ほいじゃが、アダムからモーセまでの間にも、アダムとおんなじような明らかな罪を犯さんかったもん(犯さなかつた者)も死を免れんかった。アダムは来るべき方(キリスト)の見本じゃったんじゃ。恵みの贈り物は罪とは比べもんにならん。一人の人(アダム)の罪によってようけのもん(大勢)が死ぬことになったが、神様の恵みと一人の人イエス・キリストの恵みの贈り物は、あふれるばかりに与えられるんじゃ。この贈り物は罪の結果をくつがえして下さる。裁判の席では、一つでも罪がありやあ有罪じゃが、恵みの贈り物がありや、どんだけ罪があっても無罪になるんじゃ。たった一人のせいで、一人の罪によって死が支配するようになったんなら、今度は、ただお一人の、

神様の恵みに溢れ、絶対的に義しいお方であるイエス・キリストによって命が支配するようになるはずじゃ。一人の罪によって全てのもんに有罪判決が下されたが、一人の正しい行いによって、全てのもんが無罪になって(永遠の)命を賜ることになったんじゃ。一人の人の不従順によって多くのもんが罪人とされたように、一人の人の従順によって多くのもんが義しい人とされた。律法が(人類の歴史に)導入されたんは、罪が増し加わるためじゃった。ほいじゃが、罪が増し加わったら、恩恵ははるかに豊かに満ち溢れたんじゃ。かつては罪が死を手下に(この世界を)支配してきたが、今は恩恵が義によって支配し、わしらを主イエス・キリスト様を通して永遠の命に至らせて下さるんじゃ。

第6章

ほいじゃあどがいなことになるんか。恩恵が増し加わるために、わしらは罪を犯し続けた方がええんか。絶対そうじゃない。罪に対して死んで縁を切ったわしらが、なして罪深い生き方を続けらようか。それともあんたらは知らんのんか。洗礼を受けてキリスト・イエス様とひとつにされたわしらは、その死とひとつにされたいうことを。わしらは洗礼によってキリスト様と一緒に葬られ、一緒に死んだ。ほいで、キリスト様が父なる神様の栄光の力によって死から復活されたように、わしらも(復活して)新しい命をもうろうて(もらって)生きていくんじゃ。キリスト様と一体になって死の姿にあやかれたなら、復活の姿にもあやかれるいうことよ。わしらの古い自分がキリスト様と一緒に十字架につけられたんは、罪の体が滅びて、はあ(もはや)罪の奴隷にならんようにするためじゃ。死人は罪を犯せんけえのう。わしらは、キリスト様と一緒に死んだんじゃけえ、キリスト様と一緒に生きることができると信じとる。ほいで、死から復活されたキリスト様は二度と死ぬことがない。死はキリスト様を支配できんけえじゃ。キリスト様が死んじゃったんは、たった一回だけ(わしらの)罪のため死んじゃったんで、生きとってんは、神様のために生きて行かれるんじゃ。ほいじゃけえ、あんたらも、(一度)死んで罪との縁は切れとるが、キリスト・イエ

ス様のお陰で、神様のために生きて行くんじゃあ思いんさい。死んだはずの体を罪の支配にまかせて、欲に負けるようなことがあっちゃあいけん。(せっかく神様からもうろうた)手足を不義の道具にして罪に獻げちゃあいけん。そうじゃのうて(そうではなくて)、死んでよみがえったもんとして、手足を正義の道具にして神様に獻げんさい。はあ(もはや)罪はあんたらの主人じゃない。あんたらは律法の下じゃのうて、恩恵の下におるんじゃ。

ほいじゃどうなるんな。わしらは律法の下じゃのうて恩恵のしたにおるんじゃけえ(いるのだから)、罪を犯してもええいうことになるんか。絶対違う。知らんのんか(知らないのか)。誰かの言いなりになったら、言いなりになったもん(者)の奴隷になったも同然よう。罪の奴隷になって死に導かれるか、神様の奴隷になって正義に導かれるかどっちかよ。わしやあ神様に感謝する。あんたらは、罪の奴隷じゃったが、今は伝えられた教えの標準に心から従うようになり、罪からすっかり自由になって、義しい教えに仕えるようになった。あんたらがつまらん(未熟である)けえ、分かり易いように言うちゃりよんで(言っあげている)。あんたらは自分の手足を汚れと不法の奴隷として獻げて生きとったんじゃが、今度はこれを正義の奴隷として獻げて、聖さを目指しんさい。あんたらは、罪の奴隷じゃったときには、義しさとは無縁じゃった。その結果何を得たんか。恥ずかしゅうて言えんじゃろう。行き着く所は死じゃ。ほいじゃが今は罪から自由になって、神様に仕えるもんとされ、聖なる生活を送らしてまろうとる。行き着く所は永遠の命じゃ。罪からもらえる報酬は死じゃ。ほいじゃが、神様から無償で頂ける贈り物は、わしらの主キリスト・イエス様にある永遠の命じゃ。